



ママと山奥でサバイバル
ママとの交尾そして子作り
それは俺たちの生きる喜び

時は長らく続いた戦乱の終焉間近。

終戦が近付いたことでその勢いは最後の高ぶりを見せ、多くの人間たちが命を落とした。

ある者は立ち向かい、戦いの果てに力尽き、ある者は逃げ惑った……。

とある山の奥地に、少し開けた場所があった
綺麗な池がある場所だ。

そこに一組の母子（おやこ）がいた。

もうここへ逃げてきて3ヶ月が経とうとしている。

深い山の奥底には民家すらない。

店や娯楽施設がないのは言うまでもない。

その母子は戦乱から逃げるためここへやってきたのだ……。

こんな人里離れたまるでジャングルみたいな山の奥地にいるのは俺と母親だけだ。

母親は俺を生んでくれた実の母親。

俺は現在〇6歳、そして若くして俺を生んだ母親はまだ35歳だ。

こんな年になって、そしてこんなところへ来てまで、それまでと同じように“ママ”と呼んでいる自分がなんだか不甲斐ない。

俺たちが住んでいた街は、既に壊滅してしまった。

2年前から始まった激しい内戦。

それまでの平和だった国の姿は跡形もなくなり、少し前まで見方だった人間同士が激しい抗争を繰り広げ、血で血を洗うような醜く惨い戦争が続いた。

それでも内戦が始まって1年半の間、俺たちの街は何とかまだ機能していた。

俺の家族もなんとか日々をやり過ごしていた。

しかし、終わりはいつかやってくる……。

俺たちの街にも今から丁度3ヶ月と少し前、大きな内乱が起き、ついに俺たちに安住の地はなくなった。

思い出したくもない。

歯がゆくて・・・悔しくてどうしようもない。

だけど・・・俺とママを除いて、家族は皆死んでしまった。

俺たちはかろうじて一命を取り留め、逃れ逃れ、逃げまどった。

そして命からがら数十キロ離れた街に一時避難した俺とママだったが、風のうわさで俺たちの見方の軍は敗戦し、敵軍が街を占領している状態だと知った。

そして戦争はひとまず一段落した状態だ、と。

戦火は収まっても、俺たちの居場所は帰ってこない。

街の丘の上にある小さな小屋で日々をやり過ごしていた俺とママだったが、その街も敵の支配下となってしまうことは時間の問題だった。

恐れた俺たちは、遠く遠くひたすら遠く、誰にも、敵も味方も・・・誰にも見つからない場所を探し、逃げ続けたのだった。

そして辿り着いたのが山の奥地。

周りには誰もいない緑ばかりに囲まれた場所だ。

俺たちは何をすることも出来ない。

出来ることがあるとすれば、ひたすら生きつなぎ、命を未来へと送っていくだけ。

仮にお金があっても使うことすら出来ない。

何もかも失い、全くの“ゼロ”に戻ってしまった俺たちの希望は、ただ生きている喜びを確かめ合うこと、それだけだった。

“今日も生きている”

“明日も生きていけそうだ”

そんなことを二人で確かめ合い、それを日々の喜び、そして支えにしてひたすら生きてきた。

そして・・・

“生きていることを喜びあう”

そのことは、俺とママに一人の男と女という区分への意識を明確にし始めた。生きていることを喜ぶ、生命を喜ぶ、つまり生命の誕生を喜ぶ。

そんなストレートな流れではないのかもしれない。

しかし・・・。

俺とママは、男と女。それは変えようのない事実。

だから、生きつなぐことを喜びあう度、その意味合いは濃くなっていったのだ。

“生命の誕生”

それは人間、いや動物がもつ究極の目的であり喜び。

そして生命の誕生のためには……。

男と女とがセックスをしないといけない。

まだまだ若造で性的な興味で頭の中が溢れかえっている俺と、まだ若くて綺麗なママ。

二人ともセックスへの興味は多大なものだった。

もはや戻る場所のなくなった緑の奥地で俺とママは……セックスをし始めた。

緑の中で青姦する俺たちは、もはや“セックス”と言うより完全に“交尾”の方に近い。

ママと子作りをして……。

新しい生命を作らないといけない。

それは男である俺と、女であるママの本能であった。

——体験版はここまでです——